

小・中学校学習指導要領の変遷からみた毛筆による書写指導について - 指導と評価を中心として -

教科研修部教科教育班

研究指導主事 今井清文

1 はじめに

近年、急激なコンピュータの普及により手書きによる文章の作成は、皆無に近いのが実情である。その原因は、プリントアウトされた活字の読みやすさ、レイアウトされた文字の美しさ、手直しの簡単さ、容易な保存等によると考えられる。しかし、筆を使って文字を書くことは、日本の風習として、季節の祭事、結婚時の結納目録、葬祭時の花輪等では大事にされている。また、書道は、現在でも生涯学習の一つとして広く人々に受け入れられている。

義務教育では、指導時間数は少ないが小学校第3学年から「毛筆による書写」指導として、筆を使って文字を書く学習が始まり、中学校第3学年まで続く。そして、高等学校では、芸術教科「書道」へとつながっていく。

本研究は、「硬筆指導」と「書写指導」の関係、「毛筆指導における指導と評価」等について学習指導要領の記述を中心に考え、義務教育段階での「毛筆による書写」指導の意味について究明する。

2 国語科における毛筆による書写指導の変遷

書写という語が国語科の指導のなかで使用されるようになったのは、昭和33年に改訂された小学校の学習指導要領からである。昭和26年に出された「学習指導要領一般編(試案)」では「習字」となっており、従前の習字が書写に変わった。

しかし、名前が変わっただけではなく書写の領域に「硬筆」「毛筆」が含まれるようになっ

た。特に、小学校では毛筆指導の目的の中に硬筆による書写の能力を養うことを指導することが求められるようになった。中学校においては、行書を取り入れることにより、日常生活の中で文字を正しく整えて速く書く能力が求められている。以後、目標は大きく変わっていない。

3 小・中学校における毛筆による書写の指導

(1) 毛筆による書写の指導の目的【小・中学校学習指導要領 解説「国語編」(平成11年)から抜粋】

ア 小学校第3・4学年

「毛筆による表現上の変化を求めるものでなく、この段階では、基礎的な筆使いの習得を目指し、硬筆と関連させながら点画や文字、文を書く力の定着を図る。」

イ 小学校第5・6学年

「手本との近似を競うばかりのような学習の在り方を改め、文字の書き方や基本原理を学ぶための用具としての位置づけを明らかにし、日常書写に確実な力を与える学習を展開することが必要である。」

ウ 中学校

「文字を正しく整えて速く書く能力を育てるとともに、文字に対する認識を一層深めることが期待される。高等学校芸術科書道の基礎でもある。」

(2) 用具・用材

ア 文房四宝(ぶんぼうしほう)

「筆・墨・硯・紙」の四つを「書道」の世界では、文房四宝といい、特に欠かせな

いものとされている。小学校の「書写指導」では、墨の代わりに「墨汁」、硯の代わりに「プラスチック製の入れ物（墨池）」が適当である。これに併せて、筆・文鎮・古新聞紙・ぞうきん等が必要である。

イ 筆の名称

筆の正式な名称を小学校第3学年から指導することが大切である。今後、楷書・行書・草書を学ぶ上で、「穂先」が「上・左・真ん中」と通ることを学習していくことになる。

(3) 筆の持ち方、腕の構え方

鉛筆とは、違う持ち方であり構え方であることを、教科書の写真を見せながら一人一人きちんと指導することが大切である。

(4) 指導者自身の指導力の向上

指導者自身が書道を習っていないと、「毛筆による書写指導」は大変であると思う。しかし、学習のねらいをきちんとおさえ、少し練習すれば、ポイントを押さえた指導ができるようになる。

(5) 基本点画

ア 基本点画とは、文字を形作っている点・画のことで、それぞれに名称がついている。

イ 各学年ごと、教科書にでてくるのでそのたびに指導する。

ウ 大切なことは、毛筆で習った「点画」が使われている「漢字」を今まで習った漢字から見つけだす学習をすることである。

(6) 点画の接し方と文字の組み立て方

ア 点画の接し方や文字の組み立て方は、活字と筆写（硬筆・毛筆）では大きな違いがあり、教科書体（教科書の文字）とも違いがある。

イ 小学校は教科書体活字で、中学校は明朝体活字が、それぞれ教科書で使われている。

ウ 「口」、「目」、「中」が接し方の違いで代表的な文字である。

エ 文字の組み立て方は、部首に目をつけ指導することがポイントである。

オ 部首という言葉が正式に確立されたのは、1716年に成立した「康熙字典」の中である。214の部首がその時に定められた。

カ 新しい部首を習う時、名前と同時に漢字の「組み立て」も指導することが大切である。

4 毛筆による書写指導の評価


評価にあたっては、表に示すような評価規準・評価基準表を作成するとよい。

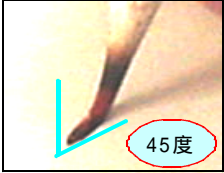
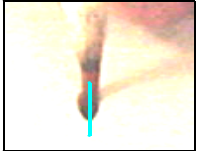



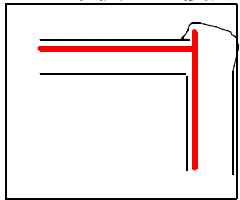

ア 評価規準は、学習指導要領の目標に基づく幅のある資質や能力の育成の実現状況の評価を示している。

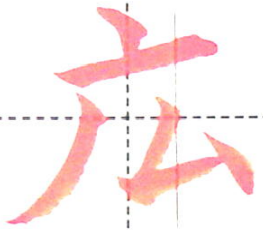

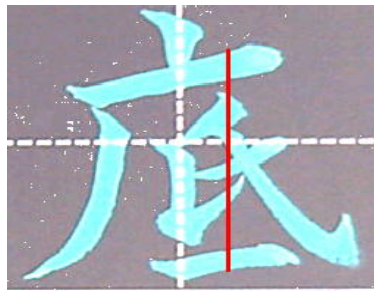
イ 国語科「言語事項」の中から関連するものをまとめたものである。

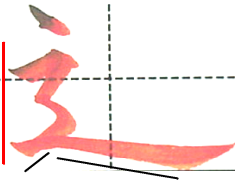

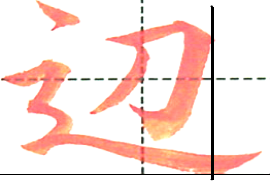
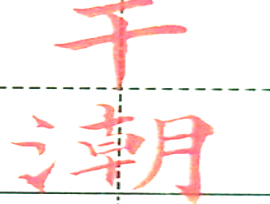
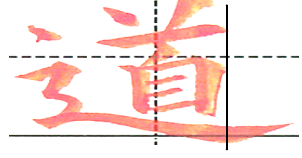
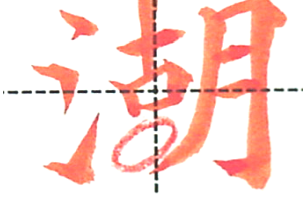
ウ C段階の子どもについては、その時間内にB段階になるような指導法を具体的に示した。

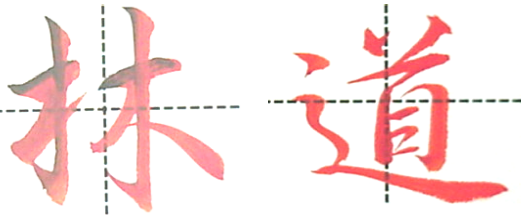
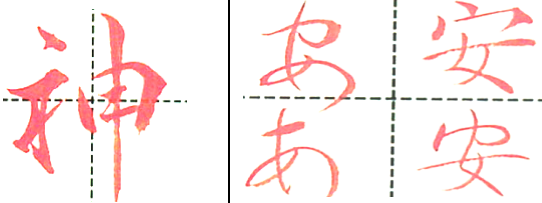
表 評価規準・評価基準表

評価規準・評価基準表			は、具体的な支援の方法
学年 (評価規準)	B：おおむね満足 具体的な例	A：十分満足 具体的な例	C：努力を要する。 具体的な例
3・4学年 (評価規準) 姿勢や用具の 持ち方を正しく している。 (1) 点画の 筆使い	義務教育段階では、側筆を基本としている。		
			

<p>穂先の位置</p> <p>軸の固定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・穂先の向きに気をつけている。 ・軸を回さずに、一定の傾きになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・穂先の向きや始筆・送筆・終筆にも気をつけている。 ・腕全体で軸を動かしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・穂先の向きが決まっていない。腕が下がっている場合が多いので教員が腕をささえてみる。 ・手首を使って、軸を動かしたり、軸を回したりしている。手の平に空間が出来ていない事があるので、空間を作るよう指導する。 
<p>始筆の角度</p> <p>終筆</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ 45 度から筆をゆっくり入れている。 ・穂先の方へ押しもどすようにしてあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・角度に気をつけながら入れている。 ・入筆の時、穂先がいつもそろっている。 ・筆の腹にも気を配りながら終筆している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入筆の角度が定まらない。穂先と腹の位置を示した手本の上から書かせる。 ・穂先がバラバラになり、うまくまとまらない。練習として、「一度筆を紙から離す」
<p>(2) 点画 (評価規準) 点画の筆使いに注意しながら文字の形を整えて書くことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・点画の筆使いに注意しながら書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はね」「はらい」などでは、角度にも注意を払いながら書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・穂先がまとまるまで、ゆっくり待たせる」 ・穂先を少し上の方に上げて、ゆっくりおろす」 終筆の筆法には、いろいろ方法があるので、塾等で習っている子どもで、方法が違う場合、子どもの筆使いを優先する。 
<p>とめ はね はらい はね おれ まがり そり</p>		<p>点</p>  <p>曲がり、はね</p>	<p>穂先が通るところ</p> <p>ややもすると、穂先が真ん中を通るため「おれ」がうまくできない子どもがいる。図のような練習用紙を作り、穂先と腹がどこを通るか練習させるとよい。</p>

<p>5・6年 (評価規準) 点画の筆使い を理解しながら 文字の形を 整えて書くこ とができる。</p> <p>(1) 点画</p> <p>(評価規準) 文字の組み立 てを理解しな がら文字の形 を整えて書く ことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 点画の筆使いを 理解しながら書 くことができる。 筆の穂先、腹に 注意をはらいな がら書くことが できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 点画の筆使いでは、 注意されなくても十 分書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 点画の筆使いが十分できてい ない。 特に、穂先の使い方に注意を はらいながら練習させる。 筆が傷んでいる場合もあるの で、子どもや保護者にその旨 知らせる。命毛が痛んでいる と、うまく筆使いができない。
<p>(2)文字の組 み立て</p> <p>中心移動</p>	 <p>中心移動</p> <ul style="list-style-type: none"> 「たれ」のある文 字の組み立てを 理解しながら書 くことができる。 	 <ul style="list-style-type: none"> 「たれ」のある文字を さがして、中心移動 に気をつけながら書 くことができる。 	 <ul style="list-style-type: none"> 文字は書くことができるが、 中心移動がうまくできていな い。 教科書にある文字に中心線を 引かせる。「たれ」の中にあ る文字が右側にきていること に気づかせる。

<p>「によう」の右はらい</p> <p>3つの部分に組み立て</p> <p>文字の大きさの違い</p> <p>字配り</p>	<p>・「によう」の右はらいの位置が正しくできている。</p> <p>左側はそろうようにする。</p>  <p>・3つの部分に分けられる文字の大きさ、間隔等を理解して書くことができる。</p> 	<p>・「によう」の形やはらいの組み立てを理解して書くことができる。</p>  <p>払いの位置に注意</p> <p>・3つの部分でできている漢字をさがして、その形の特徴を理解して書くことができる。</p> 	<p>・「によう」の形がうまくとれない。</p> <p>鉛筆で、下書きをさせ練習させる。</p> <p>穂先や腹の位置も朱筆等で示し、練習させる。</p>  <p>払いの位置に注意</p> <p>・3つの部分の特徴をつかむことができない。</p> <p>3つの部分を四角で囲み、大きさや形の特徴に気づかせる。</p>  <p>白い部分に をつけ空間の広さに注意させる。</p>
<p>中学1年 (評価規準) 字形を整え、文字の大きさ、配列・配置に気をつけて書くことができる。</p>	<p>・字配りに注意して書くことができる。</p>		

<p>漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くことができる。</p> <p>点画</p>	 <ul style="list-style-type: none"> 点画の丸み、連続、方向、形の変化に気をつけて書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな漢字についても、点画に気をつけて書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 行書の点画の変化を理解し、書くことができない。鉛筆で下書きをさせ、その上を穂先に注意させ書かせる。筆圧に注意させ、横・縦・斜め等の練習をさせる。
<p>中学2・3年（評価規準）目的や必要に応じて調和よく書くことができる。</p> <p>点画の省略と筆順</p>	<p>点画の省略</p>  <ul style="list-style-type: none"> 点画の省略と筆順の変化に気をつけて書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 楷書と比較し、行書で書くことができる。 自ら、楷書を見て点画の省略や筆順の変化に気をつけて書くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 楷書と比較し、行書で書くことができない。

5 おわりに

書写には、硬筆・毛筆の指導があり、毛筆による指導は硬筆をより確実なものにすることを目的としている。児童生徒の中には、習字教室や書道教室に通っている者もいる。この教室の目的と学校の目的が違う場合もあるであろう。

また、学校には、「 展覧会」「 競書

展」等の募集が多く来る。競書展の審査員の考え方にもよるが平素の指導の評価として応募することも児童生徒にとって励みになる。

また、習字教室等に通っている児童生徒に対しても、平素から習字の練習に励んでいるのであり賞賛に値し、学校教育と相反するものではない。

【参考文献】

- 山田勝美著、「漢字の語源」、角川書店、昭和51年
- 石川芳雲著、「標準硬筆字典」、二玄社、平成11年
- 今村南芳著、「小筆で書く楷書」、日本書道学院、平成12年

